

進学へ医学部北大 年の戦終

朝雲流れて

金色に照り

戸田中央医科グループ創設者
中村隆俊の半生

1941(昭和16)年い出た。しかし楽しい生
4月、中村隆俊は函館市 活は長くは続かない。同
立中学に入学することに 年12月には太平洋戦争が
なった。すでに兄の哲夫 勃発。隆俊たちにも戦争
が同校に通っていて、姉 の影響が出てきた。北海
の俊子も函館町立女学校 道の学校にも学徒動員が
で学んでいたから、自分 行われたとの話を耳にし
も函館に行くことにした たりした。

当時、瀬棚町から函館 哲夫は東京医科大学に合
に行くのは大変だった。 格し、東京での生活が始
1日2往復しかない瀬棚 まったが、戦争が激しく
線の北松山駅から函館本 なり、瀬棚町に疎開して
線の国縫駅まで2時間か きた。兄から、東京が一
けて行き、そこから函館 面焼け野原だという惨状
まで5時間かけて上るの を聞き、道内への進学を
だった(現在は瀬棚線は 勧められた隆俊は、北海
廃止され、代わりにバス 道大学医学部を目指すこ
が運行されている)。 とに。少しハードルが高
函館では、親戚の家に い気がしたが、哲夫の励
姉の俊子、兄の哲夫の3 ましもあり、思いきって
人で寄宿した。姉の俊子 受験することにした。そ
は、弟2人の面倒をよく して、45(昭和20)年4
見てくれた。懐かしい思 月、めでたく現役で同大



顕微鏡を覗く隆俊 1949年、北海道大学

強い思いに貢献地元

【第3話】

医学部に入学することが
できたのである。

北大医学部に入学した
ものの、同年8月に終戦
になり、物資の欠乏は著
しかった。参考書はもと
より、教科書もなかった
と言ってよいほど欠乏し
ていた。授業といえば教
授が話すことをひたすら
ノートに書き写すだけだ
った。石炭が不足してい
て暖房がとれないので、
万年筆のインクが凍りフ
ートが取れないなど、難
儀をした。

大学では基礎、病理、
臨床と学ぶことが多く、
あつという間の3年だっ
た。4年生に進学し、い
よいよインターン先を決
めなければならぬ時期
になった。

その頃、兄の哲夫は東
京医科大学を卒業し同大
に勤務。弟の秀夫も同大
に入学し学んでいた。2
人とも東京に来说と言っ
し、自分自身もまだ内地
に行つたことがなく、東
京は憧れの地でもあった。

一方、医学部の親友(現
入間川病院・風間進理事
長)は、道内の炭鉱の病
院に行くと言っていた。
当時石炭は花形産業で、
頼もしく見えたものだっ
た。隆俊は一旦、東京に
出るにしても1年で戻る
つもりでいた。当時は、
生まれ育つた北海道の医
療で貢献したいとの思い
が強かつたのである。

(敬称略) 火曜日掲載